

川端俊英

『破戒』とその周辺

部落問題小説研究

文理閣

<著者紹介>

川端 俊英 (かわばた としふさ)

1933年、中国(満州)に生まれる。敗戦後、引揚げ。広島大学卒業。立命館大学大学院修士課程(日本文学)修了。現在、同朋大学助教授。

現住所 ㊦ 520 大津市稲葉台7番23号

主要論文 — 「『セメント樽の中の手紙』の教材化」
(「日本文学」日本文学協会, 昭51・12), 「芥川龍之介の『蜜柑』」(「国語教育研究」広島大学教育学部光葉会, 昭55・11)

分担執筆 — 「芥川龍之介研究」(明治書院)

『破戒』とその周辺—部落問題小説研究—

1984年1月29日 初版発行

著 者 川 端 俊 英

発行者 黒 川 美富子

発行所 図書出版 文 理 閣

㊦ 600 京都市下京区七条河原町西南角

TEL (075) 351-7553

印刷 明和印刷 製本 池田製本所 ISBN 4-89259-071-1

目

次

序にかえて

——人権への眼醒め——……………1

一 『破戒』の読み方

——読書指導の観点から——……………7

二 『破戒』の社会性

——評価統一のための問題提起——……………29

付記——『破戒』研究に思う……………53

三 『破戒』と先行部落問題文芸……………57

四 清水紫琴『移民学園』と『破戒』……………77

五	木下尚江『良人の自白』と『破戒』	111
六	『破戒』と後続部落問題文芸 ——岩野泡鳴『斧の福松』・『部落の娘』と『破戒』——	155
七	『破戒』同時代評の部落認識	179
八	『破戒』の絶版および改訂について	209
	あとがき	231
	初出誌一覧	233

序にかえて

——人権への眼醒め——

△人生は落丁の多い書物に似ている。▽（『侏儒の言葉』）とは、芥川龍之介のアフォリズムである。思えば、落丁だらけの人生を歩んでいる私などが、まことしやかに人生を語る資格もなさそうなものだが、落丁もまた、人生を考える上での何ほどのかの契機になり得るとすれば、一人のささやかな人生の断片を話題にしてみるのも、あながち駄弁に過ぎぬとも言いきれまい。

私は満州（中国東北部）南端の遼東半島の小さな町、普蘭店で生まれた。清岡卓行の小説に『アカシヤの大連』（昭44）という芥川賞作品があるが、あの大連の近くである。当時、満州は、日本の生命線とも言われていた。張作霖爆殺、柳条橋爆破などが示すとおり、日本軍国主義の野望は満州の征服にあり、大量の軍隊（関東軍）を投入して、満鉄とその沿線の利権を握っていたことは、歴史的事実として知られているところである。

その満鉄に、私の父は教師として勤務していた。レンガ造りのロシヤ風の官舎には、ペチカがあり、現地のボーイが一人ついていた。家のすぐ裏は広々とした牧場につづいており、時折、牛の鳴き声なども聞こえてくるような豊かな自然環境のなかで、何不自由なく過ごした幼年の日々が、今

も懐かしく思い起こされる。

七歳のとき、父の転勤により山東半島の膠州灣に面する青島（チンタオ）に移ったが、そこで始まった小学校時代の記憶はいっそう鮮かである。青島は、日独戦争により日本が権利を獲得した、かつてのドイツ租借地である。港を眼下に収める要塞地跡から展望したときの、あのドイツ風の市街一面に広がる赤い瓦屋根と青々とした海との色彩感あふれる眺めは、実に美しく印象的であった。しかし、現地の中国人たちの生活は、あまりにもこの街の美しさとは不釣り合いのものであった。極端な貧富の差があり、その大多数は貧民の群れであった。そこには、クーリー（苦力）と呼ばれる最底辺層の重労働と非衛生による疫病と文盲による非文化的生活とがあった。当時小学生であった私が、とりわけ中国の子供たち、いわゆる小孩（ショウハイ）たちの姿に関心を寄せたのは当然であった。登校時に見たのは、朝から素っ裸でトンボ釣りをする少年であったし、その黒ずんだ垢だらけの体は、風呂などとは無縁の生活を物語っていた。学校の帰路に見たのは、道端にうずくまったり、寝転がったりしている飢えた素足の小孩たちであった。身につけた襤褸は汚れて光ってさえた。また友人と連れ立って外で遊ぶときなど、お菓子でも食べていようものなら、恨めしそうに見つめられたし、どこまでも後から付いて来られたりして閉口したものだ。思わず遊びに興じていたとき、ふとマンホールのなかに捨てられた赤児の死体を間近に見てしまい、衝撃的な恐怖感に襲われたこともあった。

青島の街にも、アカシヤの木は多かった。初夏ともなれば、無数の白い花房が芳しい香りを漂わ

せ、季節感にあふれた。私たちは、遊びのついでに木に登り、甘い蜜のある花房を取って食べることもあった。中国人街のアカシヤの花が無惨にも挽ぎ取られ、食べられてしまった後も、日本人居住区ではアカシヤの花ざかりはつづいていた。そんなときに、飢えた小孩たちから、アカシヤの花が欲しいと懇望されることも、しばしばあった。それが面白さに、私たちは花房に唾を吐きかけて投げてやったりしたが、彼等はちよūd猿が餌を争うように、われ先に拾って食べた。今度は靴で踏んづけて投げてやる。やはり、待ち構えていた彼等は争い合って食べた。ますます調子に乗った私たちは、とうとう小便をかけて投げてみることもまで思いついた。しかし彼等は臆するところなかった。

はからずも、少年の日の恥部をさらす羽目となったが、今にして思えば何とも不思議でならないのは、当時の私には同情心も罪悪感もなかったということである。いやむしろ、それを当然のこととさえ思い、自らの行為にいささかの疑問を抱く余地すら持ち合わせていなかった。私はいつしか中国人を人間以下の卑しい人間、つまり人間と動物との中間的存在として認識することに、すっかり慣らされていたのである。そうした認識の歪みを根底から支えていたのが、神国思想に基づく民族的優越感であったことは言うまでもない。人は人間としてすべて平等という、あまりにも基本的な人間観をまるで知らない畸形児として成長していた自分を、今更ながら空恐ろしく思う。

私の傲りを打ち砕いた第一撃は、母親の病死であった。私は悲嘆のなかで、得体の知れぬものへの憤りを感じつつ、「無力」ということの意味を初めて噛みしめていた。幼い哲学の始まりであっ

たろうか。それに追い打ちをかけたのが、予想だにできなかった日本の無条件降伏であった。もちろん、母の死ほど直接的ではなかったが、国家への信頼感の崩壊による大きな空虚感に見舞われたことは事実である。「懐疑」——これは、幼い哲学の第二章であったか？

敗戦は、子供の世界にも事態の一転をもたらした。昨日まで、媚びが悲しいほど身についていた小孩たちは、その卑屈さ、従順さから一変し、集団登校する私たちに向かって、いっせいに投石を開始したのである。初めて味わうこの屈辱感から、私は敗戦の苦々しさともいうものを、まず知らされた。それと同時に、戦争終結という事態に子供ながら鋭敏に反応した彼等と、依然として民族的優越感に安住していた私たちとの差の大きさに気づかされた。無知ながらも、彼等があれほど状況変化に敏感でありえたのは、虐げられてきたがゆえであり、それは安逸の甘い夢から醒めがたい私たちの鈍感さを叱るものでもあった。

それにもまして少年の驕慢を打ちのめしたのは、引揚げ船における米兵たちの横柄な態度であった。私は母の遺骨を抱き、父と姉とともに、LSTと呼ばれるアメリカの上陸用舟艇が引揚げ船として転用された第一回目に大沽（タークー）から乗船する集団のなかにいた。船室などはなく、ちょうど体育館のようにただっ広い鉄床の船底にぎっしり詰め込まれ、正月の厳寒の黄海上を兵器輸送なみに運ばれた。朝鮮南端の済州島が見え、日本が近づいたときには、よれよれに疲れ切った引揚げ者たちの間から、救われたような歓声が洩れたのを覚えている。そんなとき、祖国を目前しながら、無念にも栄養不良と過労の末に船中で息絶えていった一老人の痛ましい水葬の光景にも接

した。その間の米兵たちの引揚げ者に対する非人間的な扱いは目に余るものがあり、今それを逐一挙げる気にはなれない。なにしろ、銃口を日本人に向けて脅しながら口笛を吹くなど、人権無視が罷り通っていた数日間の船中生活であった。かつて中国人を蔑視し、屈辱を強いてきた私は、まさに逆転した立場に置かれ、その口惜しさは並大抵でなかったが、まだ小学生であったため、それを敗戦の悲しみとして受けとめただけで、人間認識の変革にまでは至り得なかった。

帰国後の私は、中学から高校へと戦後のいわゆる民主教育のなかで成長したが、新憲法が宣言した戦争放棄は新しい世代の誇りと自信につながったし、不可侵の権利としてすべての国民に保障した基本的人権は鬱屈した心に爽やかな風を吹き込んでくれた。しかし、実生活面において基本的人権とは裏はらな諸問題がなかったとは言えない。周囲の差別的発言から部落問題を知ったのも、この頃のことであった。身近なところで、かなり厳しい糾弾闘争も展開され、それにおののく村人たちの姿にも接した。またあるときに、朝鮮高校の教師から聞いたのは、日本の義務教育を終えて朝鮮高校に入ってくる生徒に、朝鮮人であることの劣等感を払拭させることから手がけるという実践報告であった。それは、日本の学校教育に朝鮮人差別が潜在していることを裏書きする発言でもあった。その他にも、女性差別・身障者差別・思想差別など、さまざまな差別が社会問題化し、法廷でも争われるようになったことに関心を深めた。基本的人権に抵触するような事実にも、案外に無頓着な社会生活の一面が、事あるごとに露呈し、試行錯誤の苦渋のなかで一步一步前進してきたのが、いわゆる戦後の民主化の歴史ではなかったか。こうした歩みに立脚して、一人ひとりの自覚的

な生き方が確立されるなら、憲法の理念が暮らしのなかで実践的に生かされる時代の到来も、決して遠いとは思えない。

思えば、私は不幸にして、人間平等の教育を受けなかった。そして、中国人蔑視に疑問を抱かぬ少年時代を過ごした。引揚げ船における米兵の日本人蔑視は、そのしつべ返しと言ってもいい。こうした苦々しい体験が、少くとも私の青年期における人生上のテーマ確立の基盤となったと考えてもよいように思う。そしてそれを結実させるべく、落丁の多い人生をひたすら歩みつづけることに、私なりの充実感があることもまた確かである。

以上は、私が部落問題小説、とりわけ藤村の『破戒』とその周辺の研究に執着することの背景でもあるかと思う。

一九八三年十二月

川 端 俊 英

一 『破戒』の読み方

—— 読書指導の観点から ——

はしめに

一般に文学作品は、作家の問題意識に基づき、現実の反映としての虚構の世界を描いたものであって、そこには作家自身の人生いかに生きるべきかという問題が提起されている。『破戒』もまた明治という時代に眼醒めた青年として生きた作家藤村の内面のへ悲しみを仮託した丑松という虚構の人物を通して、人間としての生き方を問いかけた小説と言える。したがって、藤村によって生かされた丑松なる人物の涙に感動し、その思想を理解し、その生きざまに潜む深い人生的な意味を自己のうちに汲みとるなら、読み手は自己変革に向けての新たな契機に恵まれることになる。

ただ、『破戒』の読みに当たって留意すべきは、丑松の葛藤を普遍化する前に、今日的観点から丑松を批判あるいは否定してしまう恐れがあるという点である。文学作品鑑賞の原則として、まず作品を歴史的時代に戻してとらえ、しかる後にそこで提起された問題を今日の自己の世界に投げ入れてとらえなおすという、いわば複眼的な読みといったものが必要である。飛鳥井雅道氏が八一つは、意識的に『破戒』を明治三十九年という歴史的時点に還元し、このときの小説がもっていた画期的な成果を分析しつくすことだ⁽¹⁾と⁽²⁾して第二に、その歴史的な『破戒』をはっきり認めた上で、現在のうけとり方、ないしは現在の部落の文化運動としてのテーマを大胆に検討してゆく必要がある⁽³⁾として、『破戒』をとりあげるときのテーマを二つに分けているのは、読みの基本姿勢について

の重要な指摘である。「破戒」は過去の作品であるが、荒廃した精神に蘇生と躍動を喚起し、視野の拡大と新たな人間認識を促す教育力の発揮を期待しうる文学作品の一つであると思う。

このような立場から、「破戒」読書指導上の諸点についての若干の考察をすすめてみたい。

丑松の葛藤と青春

『破戒』という小説は、告白に至る痛切な葛藤を通して自己の確立をはかった青年丑松の魂、つまり△眼醒めたものの悲しみ▽の記録と言える。

△たとえいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅おうと決してそれとは自白けるな、一旦の憤怒悲哀にこの戒を忘れたら、その時こそ社会から捨てられたものと思え▽（一章の三）という父の戒めに、深い意味を認めることも、疑問を抱くこともなく、ただそれに従って出生の秘密を隠しつけてきたのが丑松であった。ところが、△我は穢多なり▽と素性を公言し、△穢多を恥とせず▽精神の自由を求め、新しい生涯をきりひらいていく先輩猪子蓮太郎の思想に接するにつれ、若い心は攪乱していくのである。丑松にとって、蓮太郎の著書『懺悔録』を読むのは耐えがたい苦痛であった。なぜなら、著者蓮太郎の自己変革の歴史を目のあたりにするにつけ、その一つひとつが読者丑松にとって、身につまされるわが事であり、△自分の一生ばかり思いつづけながら読んだ▽（一章の四）からである。そうした心の痛みを通して丑松は、△同じ人間でありながら、自分等ばかりそんなに軽

蔑される道理が無い▽(1章の四)、△自分だって社会の一員だ。自分だって他と同じように生きていく権利があるのだ▽(4章の三)という思想を抱くようになる。だが、父の不慮の死によって、△隠せ▽という戒めは一段と重みを加えて丑松の心をしめつける。丑松の父は、△隠せきれないような烈しい性質の為に、世に立って働くことが出来ないような身分なら、寧ろ山奥へ高踏め、という憤慨▽(7章の六)から、烏帽子ヶ岳の麓に隠れ住んだ人であった。せめて丑松にだけは存分に生かさせてやりたいという犠牲的な愛から、△行け、戦え、身を立てよ▽と励まし、そのために△隠せ▽と戒めたのであった。遺言となったその戒めに心の震動を覚えながら、一方では蓮太郎との人間的な交流が深まるにつれ葛藤は激化し、△丑松は雪霜の下に萌える若草である。春待つ心は有ながらも、猜疑と恐怖とに閉じられて了って、内部の生命は発達することが出来なかった。ああ、雪霜が日にあたって、溶けるといふに、何の不思議があるろう。(中略)言うべし、言うべし▽(9章の四)と心は叫ぶが、△雪霜▽が陽に溶けるような現実はどこにもない。差別と偏見は、冷たい障壁となって立ちほだかり、ますます彼を圧倒する。△何故、新平民ばかりそんなに卑められたり辱められたりするのだろうか。何故、新平民ばかり普通の人間の仲間入が出来ないのであるろう。何故、新平民ばかりこの社会に生きながらえる権利が無いのであろう——人生は無慈悲な、残酷なものだ▽(19章の四)と嘆く丑松の前には、もう社会からの追放か死かの二つしか見えてこない。△何故、自分は学問して、正しいこと自由なことを慕うような、そんな思想を持ったのだらう。同じ人間だということ知らなかったなら、甘んじて世の軽蔑を受けてもられたらうものを。何故、自分は人らしいものにこの世

の中へ生れて来たのだろう。野山を駆け歩く獣の仲間でもあったなら、一生何の苦痛くるしみも知らずに過されたらうものを√(19章の七)という後悔は、すでに死を見つめたものである。死の淵に立つ丑松に覚醒をもたらししたのは敬愛する蓮太郎の死であった。政敵の襲撃に倒れた先輩の死を悼む慟哭のなかで、△思えば今までの生涯は虚偽いつわりの生涯であった。自分で自分を欺いていた。ああ——何を思い、何を煩わづらう。「私は穢多なり」と男らしく社会に告白するが好いではないか√(20章の四)と、新しい勇気をつかみ、△顕す√決意は固まるのである。

以上にみられる丑松の葛藤は、父の戒めに従って社会的安全とひきかえに精神的破滅の危機に身をさらすか、それとも蓮太郎の思想と実践にくみし、たとえ社会的生命を断たれようとも精神の自由を奪還するか——二つの生き方のせめぎ合いのなかで演じる眼醒めたものの血みどろの格闘であった。作者藤村はこのことについて、△『破戒』の中には二つの像がある。あるものは前途を憂ふあまり身をもって過去を掩はうとし、あるものはそれを顕すことこそまことに過去を葬る道であるとした√と述べている。特に丑松の場合は単なる青年期の苦惱一般としてでなく、部落差別という社会的な歪みと不可分に関連している点に特色がある。丑松の葛藤を優柔不断とか臆病と見る向きもあるが、当時の差別的現実との緊張関係を十分考慮に入れるなら、一概にそうとも言い切れまい。校長の功績表彰に冷淡な態度をとり、敬之進の退職後の恩給について郡視学と交渉するほどの丑松をさえ臆病にさせた時代的側面をおさえずして、安易に批評を下すべきではなからう。とにかく、丑松内面の二元的相剋は、虚偽の生か真実の生かの選択であり、低次の自己に甘んじるか高次の自